

◆「終戦（敗戦）70年」を「体感」する方法（が、わからない）

2015年の今年の夏、「終戦70年」という区切りにはどのような意味があるのだろうか。（「『敗戦70年』ではないか」という議論は別にするにして）

「終戦50年」ということであれば分かりやすいかもしれない。1995年のことだ。50年という区切りは、それが間違いなく歴史に属する「過去」になったということを強調することでもあった。かつては歴史学もその対象領域をそのように限定していた。（いまは「現代史」があり、「同時代史」がある）

歴史学の規準ではなく、戦争に関連して「50年」という規準があるとすれば、かつての徴兵が20歳の時であり、終戦50年後というのは、最後の徴兵検査を受けた世代が70歳を超えた時期、ということがあっただろう。（実際には戦争末期には徴兵年齢の引き下げがあった）70歳といえば、当事者たちはまだまだ元気だった。

その頃気になったのは、戦争の経験を表す言葉として長らく使われてきた「戦争体験」に代わって、「戦争の記憶」が言われ始めたということだった。当事者の存在を強烈に意識させる言葉である「体験」に対して、「記憶」とはいかにもフワフワした言葉だ。誰ということもなく、私たちの社会を漂っている経験の断片たちなのである。つまり「50年」という時間は、単に時間の目盛りの上に置かれるものなのではなくて、「過去が歴史になる」というときに、その当事者（体験者）が生き・死ぬということの意味と関係していた。

現在の「終戦70年」ということであれば、兵士として戦場を体験した彼らは最低でも90代を過ぎる。元気な人もいるだろうが、なかなか思うように体や頭が動かない人が大半だろう。1990年代半ばに戦争体験者に聞き取り調査をし、同じ人たちに2000年代なかばに追加調査したからよくわかる。さまざまな例外もあったけれども、自分の体験を語ることについての70代と80代の差を痛感した。もちろん、出生人口を考えれば、すでに幽明境を異にする人のほうが多い。戦争を生き延び、戦後を生きてきた人々が次々と亡くなっていく。

もちろん、戦争体験の聞き取りは依然として可能である。ただ、いまだ十分可能なのは、兵士としての戦場体験ではなく、子供時代の体験のほうだ。当時10歳くらいであれば体験したことの記憶もあり、現在も80歳くらいなのだから、聞き取りをすることができる。また、女性のほうが平均寿命は長いことを考えれば、彼女らの戦争体験を聞き取ることはまだまだできるかもしれない。

そこからもうひとつ。70年前に戦争は「終わった」けれども、対米英戦争はその約3年半前に始まり、あるいは対中国の戦争はすでにそこからさらに10年近く前から続いていたということである。私が聞き取り調査をした元兵士のなかにも、1930年代の中国大陆を体験して除隊したあと、1940年代に南方へ二度目の出征をした人もいた。（三度の出征をした人すらいた）その人はすでに「50年」の時点で80歳を超えており、現在存命であれば、100歳を超えるような人々である。その時代の体験は、現在ではどうに聞くことができない。戦争の拡大を防ぐ試みがことごとく失敗した時代の目撃者であり、言い方を変えれば、「10年以上も戦争を戦いながら過ごす社会」の体験者だった。

体験者の声が聞こえなくなることで、私たちの戦争体験のイメージは、戦争末期に集中するようになっている。玉砕、空襲、沖縄戦、特攻、そして原爆、玉音放送、と、戦争の悲惨さの極致が強調され、それが近年の大衆文化の中でも再生産されている。主に被害者としての戦争の記憶だ。細かい経緯が省略され、ドラマチックに強調されやすいそれらは、戦争を支え続けた社会（日常生活）に対する問いを逆に封じてしまっているようにもみえる。（いま私たちに必要なのは、むしろそこから得られる教訓でもあるのではないだろうか）

例えば日中関係がこじれ、次第に戦火が拡大してゆくなかで、国民の閉塞感やイライラは増して行き、「暴支膺懲」というスローガンが好まれたこと。「暴戾な支那を膺懲する」（＝暴虐な中国を懲らしめる）という意味である。また、やがて対米戦争が始まり、開戦初頭で大戦果を挙げると「胸のすくような思い」を多くの国民がしたという。（アメリカの対日政策は非常に厳しいものだった）この時代の雰囲気を知っておくことは、現代の日本社会にとって非常に重要なのではないか。

そして今年、「戦後 70 年」となってしまうえば、むしろもう「日中戦争勃発 80 年」（再来年の 2017 年）を考えるのとどちらが有効なのか、それほどはっきりしない。

一方で、もう少し視野を広くして、この数年のことでいえば、第一次大戦勃発 100 周年ということがあった。（「大戦終結 100 周年」が数年先である）「100 周年」であれば体験者はほぼいない出来事だから、過去を純粹に（？）「記憶」として扱い、国民の記念行事、あるいは、良くも悪くもそれぞれの個別性を超えて人類的な「普遍性」のもとで想起されるものとなる。いくつかの貴重な例外を除き、ここ数年の日本ではあまり議論されなかったが、第一次世界大戦は人類史上・文明史上の大事件である。数年後の「第一次世界大戦終結 100 年」には注意しておきたい。というのも、第一次世界大戦の経験を受け止め切れなかったことが、19 世紀後半から続く戦争と社会の関係の変容を見失うきっかけとなり、国際法や平和主義の台頭を見誤り（それが建前のものであったとしても）、日本を孤立させることにつながったからだ。ヨーロッパで行われた今年の 100 周年の式典では、戦勝国の代表の横には敗戦国の代表も並び、恩讐を超え、堂々と人類にとっての惨禍と平和という普遍的な価値の存在を確認していた。

それにくらべ、「70 年」というのは、「体感する歴史」の問題として考えた場合、やはり少し中途半端だ。解決済みでない問題も残されているというのもあるけれども、その時間は恩讐を超え、人類普遍の価値に思いをはせる日にするにはまだ短い。だから今、その意味が、私自身には正直わからない。もちろん、今年の夏も平和を誓う記念行事は繰り返されるだろうし、マスコミで取り上げられるのは予想できることである。けれども、歴史的な過去のできごとを記念するときに抱かれるべき「問い」を立て、時間の厚みを体感しようとするのが試みられることなく、なんとなく惰性で行われていないか？ 過去を認識する方法的な枠組みが失われたところで、戦争の体験や記憶を社会がどう受け止めてよいかわからず、結果として戦争の記憶が政治のおもちゃにされるのを許しているようにみえる。

70 年前に終わったという戦争の時代そのものではなく、少なくとも 70 年という時間の長さを「体感する」ということでいえば、これは若い人には使えないかもしれないけれども、自分の人生を物差しに使うというのはどうだろうか。例えば筆者で言えば、現在の自分が 1970 年生まれの 45 歳だとして（正確には 1971 年生まれの 44 歳だけれども）、アジア太平洋戦争の終わった 1945 年は、自分の生まれた年の 25 年前だった。はるかな昔に思っていた「戦争」が、

年をとってみれば、現在の 25 年前に置き直して 1990 年、バブル経済のころのことということになる。

そう考えてみれば、70 年前が（少しでも）近づいてくる。自分が子供のころ、50 歳を超えた人々はみな立派な老人で、戦争体験者だった。何か大変な経験をしてきた人、もしかすると人を殺したことがあるとか、少なくとも殺しているのを見たことがあるのではないかとかと思わせるものだった。

自分の記憶にあるそうした老人たちと、中国大陸で残虐なことをしたと非難されている日本兵たちの姿が、どうも重ならない。それでも、自分に物心がついた頃というのは、社会が戦争の影を捨てきれていなかった。ところどころでそれが（文脈をわきまえずに）吹き出してもいた。ちょうどそう感じられた分だけ、「敗戦」というできごと、「戦後」という時代を「体感」することもできていたように思う。

引き続き、少しずつでよいので、歴史認識のための基礎体力を鍛えてゆく必要がある。